小田原俳句協会報

新年を迎えて

明けましておめでとうございます。

令和六年は能登半島地震に始まり長引く猛暑、豪雨と自然災害に翻弄されました。そんな中七十周年を迎えた四月に会長に就任しました。

前年度行事の梅まつりと桜まつり、新年度の秋季の各俳句大会ほかの行事を計画通り順調に実施できました。七十七回を数えた桜まつり俳句大会については諸事情から主催の小田原市観光協会様のご理解を得て今回を以て幕を下ろさざるを得ませんでした。伝統ある俳句大会であっただけに残念な思いですが当協会の運営体制上やむを得なかったものです。

一方、五年毎の合同句集を会員の皆様のご協力で第十三集として順調に刊行できることになりました。

今年も引き続き会員の皆様のご健勝ご清吟をお祈り申し上げます。

令和七年一月

小田原俳句協会会長　村場　十五

「俳句おだわら」10句抄（688号より）

池田　忠山　抄出

名月や胎児の産まれ出るごとし　高橋　小糸
先客は猫か良夜の駐車場　星　一義
重陽や母へと届け祝ひ膳　大澤　紀子
月光に隠しやうなき隠しごと　陌間みどり
礼状を書き直したる夜長かな　荒井ちゑ子
遠き地の葬りへ祈る鰯雲　佐宗　欣二
月光や駱駝は海の夢を見る　齊藤　桂
海峡の大吊橋や望の月　小林　環
向かうにも言ひ分のあり鰯雲　鳥海　壮六
聞き役の八千代薫草の花　中村　裕子

大石　雄介　抄出

鯊を釣る腕の刺青タランチュラ　瀬戸　悠
天高し吊橋に足震へをり　若村　京子
小鳥来る落ちてきさうな空がある　寶子山京子
大福の粒あん好きの夜業かな　大沢　年子
朝顔や青きインキのエアメール　下平　美子
無花果や嗚呼（ああ）と彼（か）の名の甦る　村場　十五
よく転ぶ露の世のあまりに疾（はや）く　伊藤　道郎
十月桜咲く半世紀越えの無罪　岡本　史郎
眩しきはをとこの腕律の風　杉崎　せつ
赤い羽根足柄下郡大井町　瀬戸　正洋

新作８句

みどり児　佃　悦夫

金輪際喜雨に狂したままなりき
青林檎食む京の夢覚め切って
ごろ寝せばのた搏つばかり入道雲
みどり児のたゆたい秋も暮れなんと
暴れん坊秋日を刺しに往ったまま
秋麗の申し子としてみどり児よ
良夜にて芯からめくるめくなりぬ
満月と繋って寝入りけり

梯子乗　池田　忠山

おすましに毬麩（まりふ）あしらひお元日
正月や城へと傾ぐ城の松
雲間より湖（うみ）へ日柱初景色
玻璃戸越しのみの接吻初寝覚
初髪の仕上げは合はせ鏡もて
幼へと吹きくぼめては七日粥
ふるさとの山なみ楯に梯子乗
初場所や久々さばく庄之助

理事会だより（12・12）

一、梅まつり俳句大会について①投句は一五六名二四四組で昨年を下回る ②選句締切は一月十四日 ③大会の役割分担案検討 ④表彰状、賞品の確認（事業部、総務部）

二、立春青空句会について短冊（投句申込短冊、吊るし短冊）を配布し細部の説明（事業部）

三、合同句集について①配布は一月理事会前十四時から（追加分料金引き替え）②外部配布先の確認（編集委員長、総務部）

四、新会員：森田久江さん、川瀬芳子さん（いずれも沈丁）

理事会日程　2／13　3／13　4／10
定期総会　4／24
（毎月第2木曜日　けやき15時より）

新作８句

去年今年　　新井たか志

冬晴や海の展けるレストラン
畳屋の藁の香満ちる十二月
大年や漁船洗ふを懇ろに
柚子風呂に大き息吐く疲れかな
新刊本その侭にせり去年今年
年新た鴎ばかりの止水堰
三日早や時には鴉甘い声
パン屑に雀その他小正月

カッパドキヤ　　大石　雄介

葱坊主同士の交信カッパドキヤ
マリンバを打ってる指のどら猫ども
三三は空けておくから赤緑かめ虫よ
朦朧が灰緑嚙んで寄せてきた
漫画からパンツのような揚羽蝶
閻魔こおろぎの舟のような川のような
ちんあなごちんちん電車並んでいる
冬が美味です昼月のてんぷらは

俳句おだわら（12・19〆切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（11・22）

五里霧中戦場跡の隠れ岩窟　久江報
竜の口に陽の斑の踊る小春かな　足立　和子
浮雲や宇宙への夢冬ぬくし　川本　育子
杖ついて落葉の中を楽しめり　高橋　小糸
神水の龍首伸ばし神の留守　山﨑　悦子
　　近藤　久江

◆山北（11・28）

三度目の鉄棒冬日蹴りあげし　由里子報
見上げれば秋色キラリ裏の庭　和田恵美子
はらからの声ほがらかに朴落葉　尾﨑　幸子
日を逃す十一月の埴輪展　星　一義
カメオあしらう八十路の友や藤袴　石田加津子
　　竹下由里子

◆香雨・梅ごち（11・24）

日だまりにどこか淋しげ返り花　忠山報
大いなるものに包まれ日向ぼこ　肥後ちさこ
競ふごとくに山紅葉・谷紅葉　関戸わよこ
境内の隅に控へめ石蕗の花　青山　典子
ひと気なき神社の古木冬に入る　門松　鳳文
雲はみな先をいそがず冬日和　吉田　百代
　　吉田　康雄

新年の気配　　村場　十五

大島遥かなり蜜柑撓わなり
古暦ひと日ひと年励みしか
早起きに無音の朝初暦
常の坂なれども今朝の淑気かな
鳥声はいづこにあらむ初日の出
初日浴ぶる番の矮鶏や端社（つまやしろ）
読初のしばしを正座時間かな
箱根駅伝家族総出にふさはしき

初東風　　陌間みどり

おもむろに闇脱ぐ天守初あかり
夫に添ひ此処がふるさと初山河
旋盤のくろがね光り淑気満つ
おさがりの静けさに覚めまた眠る
二日はやピザ屋のバイク音立てて
初東風や紙垂のひらめく楠大樹
行きずりの鳥居を潜る小正月
どんど火の見えて駆け出す畷道
浄土へとつづく青空返り花
椋の木は力ゆるめず神の留守
狩行との再会かとも返り花

◆こよろぎ（12・12）　　つとむ報

煮凝をつついて話す今日のこと　大澤　紀子
薪割りの楔新たに冬構　高杉掘三朗
やや鈍き五体の動き日向ぼこ　板谷　雅泉
遠山の枯の極みはむらさきに　植松テル子
書棚より詩集一冊冬ごもり　神山つとむ

◆沈丁（12・5）　　寶子山報

雪だるまあの子に投げた日の遠く　若村　京子
廃校にシニア筋トレ春隣　柳澤ミサ子
冬紅葉戦火なき世の慰霊塔　田中　惠一
雪合戦三手に分かれてヨーイドン　河本　純子
白い息吐く生きているということ　瀧本　敦子
小春日や手のしわみせ合う笑い声　勝木　澄子
「魚幸」に兄弟五人ブリ大漁　菅野　英余
焼きいかの香り車内に冬景色　髙井　幸子
指先の利くが幸せ毛糸編む　片野　節子
煤払い窓拭く我に母を見ゆ　峯尾ユキエ
枯芒白髪なりて朝日待つ　清水美代子

新作８句

恵比寿紙　畠　梅乃

初しぐれ魚にきしゆりと銀の串
笹鳴や夕日は藪に濁りたる
雪の茶房十六の吾まだをりぬ
大年の夜を迎ふる山の色
鹿鳴いて嬢歌の山の初明り
初電車怒濤の音を寄せつけず
久女忌の雪になりたき雨の音
立春大吉大歳時記に恵比寿紙

バーコード　寶子山京子

いやいやを犬としてゐる冬の岬
こがらしや何をするにもバーコード
市庁舎の時計目で追ふ神無月
枯すすき時間たつぷりありますよ
初日出づ雲のよこしまものともせず
福寿草手かせ足かせ遠に捨て
鯛焼のぱりつとむづい恢復期
ざわめくよ硝子の部屋のシクラメン

陽だまりを愛でて寄るなり仏の座　松下　俊之
残業の帰りにふらり日記買ふ　武居裕美子
冬の水写して動く鷺の首　森田　久江
初デートイルミネーション幸となる　川瀬　芳子
葱刻む音幸ひをきざむ音　寶子山京子

◆春野（11・17）　きよ志報

総立ちの泡立草の輝々として　秋山　昇
クラス会皆ふつくらとなり小春　伊藤はる子
閉めぎわの店にかけこむちゃんちゃんこ　内田知江子
おもひ切り遊ぶ勤労感謝の日　尾﨑　一夫
在りし日のまま月光の譜面台　瀬戸　悠
冬桜空青すぎて硬すぎて　二見　和江
合鍵を隠し通せし神の留守　長谷川きよ志

◆青梅（12・11）　幸子報

行く秋や元気をもらひ元気出す　大塚　行人
初冬の稜線かたし双子山　湯本とし子
連れ立ちて寺へ詣づる小春かな　加藤まり子
初霜のひと夜に焦げる芋畑　久保寺トミ子
極楽と思ふ彩（いろ）いろ紅葉晴　田中　幸子

◆みなみ（11・16）　かほる報

大根の朝の間引菜活きいきと　豊田　幸枝

跳ねる事忘れていたり飼い兎　斉藤　静
初冬や畑の野菜元気です　小瀬村信子
直売の葉付大根選びけり　柳川　紀枝
冬鴉土手の薄日をつまみ喰い　加藤　富江
月に兎婆は童話をみな忘れ　加藤れい子
木の葉髪僧の法話に聞き入りぬ　加藤　健治
身のどこか軋む音して冬に入る　市川めぐみ
大根の厨に育つ滋味慈愛　加藤かほる

◆おほゐ（12・11）　きよ子報

路地裏の夜を匂わす焼藷屋　中村　昌男
年の暮れ日捲り暦低く掛け　中津川晴江
平凡な日々を重ねし去年今年　廣田　悦子
逝きし子の広き空部屋月冴ゆる　原　仁子
虎落笛我胸中に鳴ることも　松良　榮美
早起きて香りし吐息冬薔薇　安池　利枝
隙間風親の添い寝の懐かしき　二上　光子
北風も合わせて配る郵便夫　横塚　昌平
山眠る獣の道は里へ延び　石井千代子
あの店の石焼芋と指定され　小野　菊土
枯蓮にまだ息吹あり水鏡　香川　花子
核廃絶訴え稔る十二月十日　加藤　春江
木の実降る今年の音色は寂しかり　瀬戸とみ子
柚子風呂の柚子の浮力を遊びけり　髙橋みどり
したい事まだ出来る事年歩む　中根登美子
大いなる懐に今冬銀河　石井きよ子

◆実のり（12・18）　たか志報

落葉踏む音や夕闇せまり来る　荒井ちゑ子
老てなお我を通したる木の葉髪　岩本ひさみ
電飾の街賑やかな師走の夜　杉本　久子
遮断機下り深く息する師走晴　木村　幸枝
味噌蔵の窓高かりし冬欅　新井たか志

◆鷹（12・6）　十五報

シンガーの顔にギターに落葉ふる　青木　孝子
寒禽の影のすばやき朝かな　池田　令子
膝掛のタータンチェック午後のお茶　西賀　久實
とみかうみ物干し竿に停まる鵯　佐宗　欣二
膝掛に聴き入る話富士噴火　中田　笑子
膝掛に足組み替へてダリ画集　百川　秀子
露地に子の集まる頃や落葉掃く　山﨑美知子
酉の市三本締めの爪赤し　柏木　良花
菊焚いてなお菊香る日暮かな　庄司　下載
小春日やショーウィンドーに眠る猫　瀬戸　りん

持つてみて適ふ大きさ熊手市　高橋久美子
打ち菓子の松や椿や年用意　中山智津子
凩は帆綱を鳴らし海暮るる　齊藤　桂
ほつほつと山雨秋海棠揺るる　芹澤　常子
土器片にもみがらの跡冬の雁　深澤　一華
大太鼓打てるふるへや文化の日　大島美恵子
フィヨルドの空は狭しよ白鳥座　田下　昌人
闇汁に青年と子等沸きにけり　中根　和子
薄日差す冬桜ほつほつ咲いて　加藤　幾代
身を委すヘアピンカーブ山粧ふ　高橋千代子
縄飛びの地を打つ縄や空を駆く　守屋　まち
スーパーのシニア割引年用意　米山　翠
古き家守りし夜やちゃんちゃんこ　來田　新子
陽は地球（ほし）の闇夜を見ずや去年今年　青山　典仁
老犬も嫗も元気今朝の冬　大沢　年子
聞香に旅甦る寒椿　小林　環
直向きに時を歩むや去年今年　澁谷　明子
ほくほくとポトフ取り分け年の暮　下平　美子
茶の花や旧岸邸の靜なり　鳥海　壮六
棕櫚の葉をなぶる朝風札納　古屋　徳男
懐手して多弁なるをとこかな　村場　十五

◆草むら（12・20）

豆炭あんか足に生涯残る傷　重満報
真夜中は大樹と話すキリギリス　石井　秀稀
木の葉雨しばし大樹の声を聴く　佃　悦夫

◆零（12・19）

冬晴れの遠出に聴きし第九かな　佐々木重満
雪冤とはかなしき言葉虎落笛　史郎報
眠りゆく富士に初雪うすごろも　青木たけを
窓ふいて母の手偲ぶ十二月　伊藤　道郎
にび色の薄衣（ぎぬ）まとい山眠る　川合　昌子
地滑りの山肌無残山眠る　佐藤　正子
横顔の希望と絶望冬茜　中村　裕子
ノーベル平和賞地球の灯台被団協　野川木一路
　　本多登美子
　　岡本　史郎

◆無所属

夫あらば夫と言祝き去年寿齢　小林永以子
あかんぼのドーナツ枕文化の日　畠　梅乃
肌荒れの馬油味方に八十才　岩楯惠津子
黄落や橅の実錐の尖もち　出澤　洋子
地の底の秋思汲み上げつるべ井戸　北村　文江
木枯や昭和普請の木枠窓　一ノ瀬茂代
なまむぎなまごめなまたまご柔軟體操　大石　雄介

冬の海ハチジョウススキとやってきた　大石　和子
木枯や医師に網膜覗かれて　小澤　園子
老いらくの恋や師走の珈琲二杯　瀬戸　正洋
歯抜け婆もぐらに灸を据ゑてをり　小島ノブヨシ
ほつほつと団地の灯り大晦日　山本　すみ
木枯しやシュシュッと圧力鍋の音　岡田　典代
日の移る山へ反り身の蜜柑捥ぎ　山田　照子
凍て凍てて愛する君の夢を見る　穂坂志げる
年の暮おにぎり一この昼餉かな　神野美代子
青信号踏み出す一歩みな師走　田畑ヒロ子
うそ寒や体重計の電池切れ　杉山あけみ
落陽の低き翳さす冬の雲　大佐田うづき
はじめてのピアスの揺れるクリスマス　須田　聡子

△　△　△

俳句おだわら鑑賞（令和６年11月号）

中山智津子

あつあつの焼芋今日も生きてゐる　米山　翠

「おおあつい」と云いながら手の平で焼芋をころがしている。割った瞬間立ち上る湯気や香り、色が目に浮かぶ。上五「あつあつの」だけでこれだけの景が読み取れる。上五の効果は大きい。「生きてゐる」には作者の深い思いがあるのであろうが、お芋の温かさに今日も一日元気に過ごせた幸せを感じている作者。

私が始めて焼芋を手にした時の新聞紙の感触、香り、湯気を思い出させてくれた一句である。

峯尾ユキエ

新米やご飯の供は不要なり　石井秀稀

「新米」おいしいですよね、口の中に甘さが広がりおかずなど無くても食べられます。

わが家は米農家でした。収穫された新米を食べる時は全員食卓に並び、ニコニコ顔で何杯もお替りしたものでした。

昨今は外国からの旅行者が米の旨さに気付き需要が増え、我々食べる米が品薄になる現象も起きています。この句は読んだ人達にそれぞれの「新米物語」を思い出させる事でしょう。。

城苑俳句・春の部

（合同句集第十二集50～65頁より近藤久江抄出）

散在の石も仏や風光る　斉藤　静
大空の雲に消えたる初雲雀　坂入清四郎
雛の前やんちやも正座かしこまる　坂元　一義
げんげ田や絶滅危惧種なる緑肥　佐々木重満
花菜雨父の独りをいま想ふ　佐宗　欣二
真っ直ぐな父思う空花辛夷　佐藤　正子
春浅し陽を拾ひ行く乳母車　故澤口　文子
ほどほどの暮しに馴れて春惜しむ　下澤　操子
金屏の袖の紅梅受賞せり　杉崎　せつ
蕗の薹土の匂ひと日の匂ひ　杉本　久子
桜蕊降るや要らないカギ括弧　杉山あけみ
裸眼では見えぬあれこれ蝶生まる　須田　聡子
書き心地ためす螺線やヒヤシンス　須田　晴美
雨後の蕾ふくらむ黄水仙　関根　琉子
桜満つ煩悩一つ置いて来る　瀬戸とみ子
春眠の出口に夫を見失ふ　瀬戸　悠
晩春や湧きて崩るる万華鏡　瀬戸　りん
朝羽振る湖の茜や仏生会　芹澤　常子
捏ね鉢で色染まりゆく蓬餅　髙井　幸子
夕桜見上げる喉の白さかな　故髙橋フミ子
梅咲くや市旗に国旗に風やはし　高橋久美子
律律しさや生活の胸に梅五ひら　高橋　小糸
春の日をはじいていたり天守閣　高橋　秋月
百千鳥日向へ鉢を移しけり　高橋千代子
沈む日に富良野の春を惜しみけり　故高橋　正子
梅の香や籠もれる我を誘い出す　髙橋みどり
家人なき庭に音なく梅ひらく　瀧本　敦子
桃色の針のホチキスもの芽出づ　竹下由里子
蹴轆轤やなりたきやうに春の土　田下　昌人
菜の花を活けてはなやぐ仕事部屋　田代　孝子

梅まつり俳句大会について

日　時　令和7年2月9日（日）
会　場　おだわら市民交流センターUMECO
　　第1・2・3会議室
受　付　11時　投句締切　12時　開始　12時半
席　題　春季雑詠1句　当日発表席題1句
　　選：総互選
結社賞　各グループは当日までに千円相当の賞を
　　ご用意の上事業部にご提供ください。
理事集合　9時半

＊桜まつり俳句大会は昨年四月の七十七回を以て終了致しました。

新会員を募集しています
お知り合いをお誘いください

〈小田原俳句協会のご案内〉

俳句を通じて社会文化の向上に資すると共に、会員相互の親睦をはかることを目的としています。

1. 小田原俳句協会報を毎月発行し「俳句おだわら」欄にひとり一句、お互いの句の鑑賞、新作発表などが掲載されます。昭和四十一年に創刊され一回の欠損もなく本号で六九〇号を数えます。
2. 合同句集を五年毎に発行し、ひとり二十句掲載（令和七年に第十三集）。
3. 俳句大会、吟行会の実施等
   - ○小田原梅まつり・秋季の俳句大会
   - ○立春句会（小田原城址公園の梅に短冊吊し）
   - ○秋の吟行会
   - ○小田原城天守閣前に会員俳句短冊の掲示
   - ○各地区俳句大会への協賛参加
4. 年会費　三千円（郵送の場合は別途郵送料）

＊「自分時間手帖」（小田原市発行）の団体・サークル情報に協会と個別グループが紹介されています。

入会の問い合わせ先

○最寄りのグループ代表者等当協会会員

○総務部長（佐々木）○八〇ー一二四七ー八八七八

小田原俳句協会　〒二五〇ー〇〇四二　小田原市荻窪五四九ー十七　村場　十五方

立春青空句会のお知らせ

日　時　令和7年2月3日（月）雨天決行

集　合　小田原城天守閣　本丸広場　10時

短冊つるし後句会　・短冊は12月理事会にて配布（立春・梅に因んだ句、1月の理事会または当日に持参下さい）

句会場　天守閣広場　本丸茶屋　☎二三ー八一〇〇

句会場集合　11時

当日嘱目二句を11時半までに短冊にて

本丸茶屋で食事（北条うどん、早雲そば）

句　会　13時より総互選（事前投句と当日句）、披講は各自

会　費　千円（食事代、賞品等）

＊事前申込：一月理事会で短冊または葉書（1月24日まで）に「当季雑詠」一句を書いて申し込み

申込先　〒250-0208

小田原市下大井219-1　田中幸子

＊投句上のお願い＊

俳句大会投句と同様に毎月の投句についても、楷書で大文字、小文字をはっきりお書きください。

（広報部）